§4. 全射, 単射と合成写像

写像に関する基本的概念として, 全射および単射というものが挙げられる.

定義 4.1 X, Y を空でない集合, $f : X \to Y$ を X から Y への写像とする.

任意の $y \in Y$ に対して, ある $x \in X$ が存在し, $y = f(x)$ となるとき, f を上への写像または全射という.

$x_1, x_2 \in X$, $x_1 \neq x_2$ ならば, $f(x_1) \neq f(x_2)$ となるとき, f を 1 対 1 の写像または単射という.

全射かつ単射である写像を全単射という.

注意 4.1 定義 4.1 において, f が全射であるとは $f(X) = Y$ となることである.

また, f が単射であるとは, 対偶を考えると, $x_1, x_2 \in X$, $f(x_1) = f(x_2)$ ならば, $x_1 = x_2$ となることである. よって, f がこの条件をみたすことを単射の定義としてもよい.

例 4.1 関数 $f : \mathbf{R} \to \mathbf{R}$ を

$$f(x) = x^2 \quad (x \in \mathbf{R})$$

により定める. このとき, f は全射ではない. 実際, 例えば, -1 は f の値域の元, すなわち, $-1 \in \mathbf{R}$ であるが, $f(x) = -1$ となる定義域の元, すなわち, $x^2 = -1$ となる $x \in \mathbf{R}$ は存在しない. また, f は単射ではない. 実際, 例えば, -1 および 1 は定義域の異なる元, すなわち, $-1, 1 \in \mathbf{R}$, $-1 \neq 1$ であるが, $f(-1) = f(1) = 1$ である.

例 4.2 X を空でない集合とし, $n \in \mathbf{N}$ に対して, 1 から n までの自然数全体の集合を X_n とおく. X が n 個の元からなる有限集合であるとは, X から X_n への全単射が存在することに他ならない.

問 4.1 関数 $g : \mathbf{R} \to [0, +\infty)$ および $h : [0, +\infty) \to \mathbf{R}$ を

$$g(x) = x^2 \quad (x \in \mathbf{R}), \quad h(x) = x^2 \quad (x \in [0, +\infty))$$

により定める.
(1) g は全射であるが, 単射ではないことを示せ.
(2) h は全射ではないが, 単射であることを示せ.

問 4.2 X, Y を空でない集合とし, $X \subset Y$ とすると, X から Y への包含写像は単射であることを示せ.

問 4.3 問 3.10 の写像 f を考える. すなわち, 集合 X, Y を $X = \{1, 2\}$, $Y = \{3, 4\}$ により定め, 写像 $f : X \to Y$ を $f(1) = 3$, $f(2) = 3$ により定める. f は全射でも単射でもないことを示せ.

問 3.10 でも述べたように, 定理 3.1 (3), (4), (9), (10) においては, 必ずしも等号がなりたつとは限らないのであった. しかし, 写像が全射或いは単射である場合は等号を示すことができる.

定理 4.1 X, Y を空でない集合, $f : X \to Y$ を X から Y への写像とし, $A, A_1, A_2 \subset X$, B, $B_1, B_2 \subset Y$ とする. このとき, 次の (1)〜(4) がなりたつ.
(1) f が単射ならば, $f(A_1 \cap A_2) = f(A_1) \cap f(A_2)$.
(2) f が単射ならば, $f(A_1 \setminus A_2) = f(A_1) \setminus f(A_2)$.
(3) f が単射ならば, $f^{-1}(f(A)) = A$.
(4) f が全射ならば, $f(f^{-1}(B)) = B$.

証明 (2), (4) のみ示す.
(2): まず, 定理 3.1 (4) より,

$$f(A_1 \setminus A_2) \supset f(A_1) \setminus f(A_2)$$

は常になりたつ.

次に, $y \in f(A_1 \setminus A_2)$ とする. このとき, 像の定義より, ある $x \in A_1 \setminus A_2$ が存在し, $y = f(x)$ となる. 特に, $x \in A_1$ だから, $y \in f(A_1)$ である. ここで, $y \notin f(A_2)$ であることを背理法により示す. $y \in f(A_2)$ であると仮定する. このとき, ある $x' \in A_2$ が存在し, $y = f(x')$ となる. 仮定より, f は単射だから, $x = x'$ である. よって, $x \in A_2$ となり, $x \in A_1 \setminus A_2$ であることに矛盾する. したがって, $y \notin f(A_2)$ だから, $y \in f(A_1) \setminus f(A_2)$ である. すなわち,

$$f(A_1 \setminus A_2) \subset f(A_1) \setminus f(A_2)$$

である.

以上より, (2) がなりたつ.

(4): まず, 定理 3.1 (10) より,

$$f(f^{-1}(B)) \subset B$$

は常になりたつ.

次に, $y \in B$ とする. 仮定より, f は全射だから, ある $x \in X$ が存在し, $y = f(x)$ となる. よって, 逆像の定義より, $x \in f^{-1}(B)$ である. 更に, 像の定義より, $y \in f(f^{-1}(B))$ である. したがって,

$$f(f^{-1}(B)) \supset B$$

である.

以上より, (4) がなりたつ. □

問 4.4 次の問に答えよ.

(1) 定理 4.1 (1) を示せ.

(2) 定理 4.1 (3) を示せ.

次に, 合成写像について述べよう. X, Y, Z を空でない集合, $f : X \to Y$ を X から Y への写像, $g : Y \to Z$ を Y から Z への写像とする. このとき, X から Z への写像 $g \circ f : X \to Z$ を

$$(g \circ f)(x) = g(f(x)) \quad (x \in X)$$

により定めることができる. $g \circ f$ を f と g の合成写像または合成という.

例 4.3 集合 X, Y, Z を $X = \{1, 2, 3\}$, $Y = \{4, 5, 6\}$, $Y = \{7, 8, 9\}$ により定め, 写像 $f : X \to Y$, $g : Y \to Z$ を $f(1) = 4$, $f(2) = 5$, $f(3) = 5$, $g(4) = 9$, $g(5) = 8$, $g(6) = 7$ により定める. このとき, 合成写像 $g \circ f : X \to Z$ が定義される. 例えば,

$$(g \circ f)(1) = g(f(1)) = g(4) = 9$$

である.

問 4.5 例 4.3 において, $(g \circ f)(2)$ および $(g \circ f)(3)$ を求めよ.

写像の合成は結合律をみたす. すなわち, 次がなりたつ.

定理 4.2 (結合律) X, Y, Z, W を空でない集合, $f : X \to Y$, $g : Y \to Z$, $h : Z \to W$ をそれぞれ X から Y, Y から Z, Z から W への写像とする. このとき,

$$h \circ (g \circ f) = (h \circ g) \circ f$$

がなりたつ.

証明　まず, 合成写像の定義より, $h \circ (g \circ f)$ および $(h \circ g) \circ f$ はともに X から W への写像である.

次に, $x \in X$ とすると, 合成写像の定義より,

$$(h \circ (g \circ f))(x) = h((g \circ f)(x)) = h(g(f(x))) = (h \circ g)(f(x)) = ((h \circ g) \circ f)(x),$$

すなわち,

$$(h \circ (g \circ f))(x) = ((h \circ g) \circ f)(x)$$

である.

よって,

$$h \circ (g \circ f) = (h \circ g) \circ f$$

である. □

注意 4.2　X を空でない集合, $f, g : X \to X$ を X から X への写像とする. このとき, 2 つの合成写像 $g \circ f, f \circ g : X \to X$ を考えることができるが, $f \circ g = g \circ f$ がなりたつとは限らない.

例えば, $X = \mathbf{R}$ とし, 関数 $f, g : \mathbf{R} \to \mathbf{R}$ を

$$f(x) = -x + 1, \quad g(x) = x^2 \quad (x \in \mathbf{R})$$

により定める. このとき,

$$(g \circ f)(-1) = g(f(-1)) = g(-(-1) + 1) = g(2) = 2^2 = 4,$$

$$(f \circ g)(-1) = f(g(-1)) = f((-1)^2) = f(1) = -1 + 1 = 0$$

だから,

$$(g \circ f)(-1) \neq (f \circ g)(-1)$$

である. よって, $g \circ f \neq f \circ g$ である.

問 4.6　注意 4.2 において, $X = \{0, 1\}$ とすると, 同じ $f(x)$ および $g(x)$ の式を用いて, 関数 $f, g : \{0, 1\} \to \{0, 1\}$ を定めることができる. このとき, $g \circ f = f \circ g$ であることを示せ.

写像の合成について, 次がなりたつ.

定理 4.3　X, Y, Z を空でない集合, $f : X \to Y$ を X から Y への写像, $g : Y \to Z$ を Y から Z への写像とする. このとき, 次の (1), (2) がなりたつ. 特に, f, g がともに全単射ならば, $g \circ f$ も全単射である.
(1) f, g がともに全射ならば, $g \circ f$ は全射である.
(2) f, g がともに単射ならば, $g \circ f$ は単射である.

証明　(1) のみ示す.

$z \in Z$ とする. 仮定より, g は全射だから, ある $y \in Y$ が存在し, $z = g(y)$ となる. 更に, 仮定より, f は全射だから, ある $x \in X$ が存在し, $y = f(x)$ となる. よって, $z = g(f(x))$, すなわち, $z = (g \circ f)(x)$ となる. したがって, $g \circ f$ は全射である. □

問 4.7　定理 4.3 (2) を示せ.

問 4.8　集合 X, Y, Z を $X = \{1, 2\}$, $Y = \{3, 4\}$, $Z = \{5\}$ により定め, 写像 $f : X \to Y$, $g : Y \to Z$ を $f(1) = 3$, $f(2) = 3$, $g(3) = 5$, $g(4) = 5$ により定める. このとき, 定理 4.3 (1) の逆はなりたっていないことを説明せよ.

問 4.9 集合 X, Y, Z を $X = \{1, 2\}$, $Y = \{3, 4, 5\}$, $Z = \{6, 7\}$ により定め, 写像 $f : X \to Y$, $g : Y \to Z$ を $f(1) = 3$, $f(2) = 4$, $g(3) = 6$, $g(4) = 7$, $g(5) = 7$ により定める．このとき, 定理 4.3 (2) の逆はなりたっていないことを説明せよ．

定理 4.3, 問 4.8, 問 4.9 に関して, 次がなりたつ．

定理 4.4 X, Y, Z を空でない集合, $f : X \to Y$ を X から Y への写像, $g : Y \to Z$ を Y から Z への写像とする．このとき, 次の (1), (2) がなりたつ．
(1) $g \circ f$ が全射ならば, g は全射である．
(2) $g \circ f$ が単射ならば, f は単射である．

証明 (2) のみ示す．

$x_1, x_2 \in X$, $f(x_1) = f(x_2)$ であると仮定する．このとき, $g(f(x_1)) = g(f(x_2))$, すなわち, $(g \circ f)(x_1) = (g \circ f)(x_2)$ である．仮定より, $g \circ f$ は単射だから, 注意 4.1 で述べたことより, $x_1 = x_2$ である．よって, f は単射である． □

問 4.10 定理 4.4 (1) を示せ．

更に, 次がなりたつ．

定理 4.5 X, Y, Z を空でない集合, $f : X \to Y$ を X から Y への写像, $g : Y \to Z$ を Y から Z への写像とする．このとき, 次の (1), (2) がなりたつ．
(1) $g \circ f$ が全射で, g が単射ならば, f は全射である．
(2) $g \circ f$ が単射で, f が全射ならば, g は単射である．

問 4.11 次の問に答えよ．
(1) 定理 4.5 (1) を示せ．
(2) 定理 4.5 (2) を示せ．

X, Y を空でない集合, $f : X \to Y$ を X から Y への写像とし, f が全単射であると仮定する．このとき, $y \in Y$ とすると, f は全射であるから, ある $x \in X$ が存在し, $y = f(x)$ となる．更に, f は単射であるから, このような x は一意的である．よって, y に対して x を対応させる規則を考えることができる．これを f^{-1} と表し, f の逆写像という．f^{-1} は Y から X への全単射となる．更に, f^{-1} の逆写像は f である．なお, 写像を関数という場合は, 逆写像を逆関数ともいう．

例 4.4 (指数関数と対数関数) $a > 0$, $a \neq 1$ をみたす a を 1 つ固定しておく．このとき, 関数 $f : \mathbf{R} \to (0, +\infty)$ を

$$f(x) = a^x \quad (x \in \mathbf{R})$$

により定める．すなわち, f は a を底とする指数関数である．f は全単射となるから, f の逆関数 $f^{-1} : (0, +\infty) \to \mathbf{R}$ が存在するが, これは a を底とする対数関数に他ならない．すなわち,

$$f^{-1}(y) = \log_a y \quad (y \in (0, +\infty))$$

である．

問 4.12 X, Y, Z を空でない集合, $f : X \to Y$ を X から Y への全単射, $g : Y \to Z$ を Y から Z への全単射とする．このとき, $g \circ f : X \to Z$ は全単射で,

$$(g \circ f)^{-1} = f^{-1} \circ g^{-1}$$

がなりたつことを示せ．